

## 令和元年度第2回逗子市地域福祉計画・逗子市地域福祉活動計画懇話会会議概要

日時 2020年（令和2年）2月18日（火）

午前10時00分から12時10分

場所 市庁舎5階 第3会議室

### 議題

1. 計画の進捗状況について
2. その他

**出席者** 22名（メンバー12名、アドバイザー1名、市職員3名、  
市社会福祉協議会職員2名）

**傍聴者** なし

### 意見概要

#### 地域づくりについて

（メンバー）

避難行動要支援者の個別支援プラン作成について、未回答者に対する最終的な確認を個々に行うことは困難との防災安全課の説明があったが、市職員が個別訪問等で対応することについて検討できないのか。それは人員配置の点で困難なのか。また、自治会や社会福祉協議会と協力する方法について検討できないのか。未確認者の割合は2年前からほぼ減っていない。

（防災安全課）

市職員による個別訪問は、未回答者約1,000名となり、困難と考えている。昨年12月に未回答者1,021名に送付したがリアクションは210名程度からしかなく、回収率が望めないことを改めて実感した。今後は自治会や民生委員への協力を依頼していきたい。

（メンバー）

その状況も以前から変わっていない。

（メンバー）

地域の要支援者に確認したが、台風19号の際、市からも民生委員からも自主避難の呼びかけが全くなかったとのこと。市の職員ができないのであれば、自治会や民生委員を動かしていかないといけない。

(メンバー)

今までのように制度の形だけでできれば良いということで許される状況ではない。

(メンバー)

避難行動要支援者の避難支援は、有事に自治会だけでは動ききれない。自助が原則。自助は人として基本的なことだ。その際、近所間で日頃の関係性があれば、声かけぐらいはできるだろう。日頃から、サロンや自治会で、たとえ参加者が少なくても、少しでも関係性を繋ぎ続けていないと、いざという時に動けない。少しずつでもやっていくしかない。このようなことは、人次第というところがある。地域だけでも、行政だけでもやりきれない。一人ひとりが自分たちでできることをやっていくしかない。

(メンバー)

台風の際に、高齢夫婦が悪天候の中、自宅から遠い沼間コミュニティセンターまで避難したことを聞き、近隣間で声かけし合えれば支援できたのに、と地域では話し合いがあった。見守りの方法を考え直さないといけない、と反省することになった。

(アドバイザー)

具体的な災害があり、ようやく実感的に考えられるということもある。計画とは、何事も事件が起きる前にどうするか、ということの形にするもの。これまでは、現実をイメージできないことが多かったが、最近の災害でより想定が可能となった内容もある。このことから、計画は、より具体的、明確に行うことが必要である。「本当にできるのか」の視点で、できることを着実にやっていく必要がある。計画とはそのための施策である。

自治会がない、民生委員がない地区について、その地区に存在する様々な機関、例えば包括ケア等の支援の手に目をとめ、連携させ情報を共有することで前に進む。また、世代間の交流といっても関わり方が双方難しく、意図的にやっていかないとギャップを埋められないところもあるので、様々な世代への呼びかけ方が課題である。

避難行動要支援者の個別支援プランについては、妊産婦と乳幼児が未回答の半分以上である。しかし、行政が一度でも未回答者と接触を持つとしたら、その時のアプローチの方法を工夫することによって進捗するだろう。障がいのある人についても同様だ。まずは接点を持つことが重要である。先ほど話題にあがった池子住民自治協議会で行われている「わんわんパトロール」もその通りだ。

情報提供をして、集まった情報をどのように活動に繋げるか、どのように伝えるかがないと、具体化、明確化に繋がらない。今後、計画を策定していく際、具体化、明確化しないと、いつまでも同じようなことを言っていてなかなか進まない、という評価になってしまい、市民に響いていかない。

## 人づくりについて

(メンバー)

ふれあいフェス in ずしについて、会場である逗子アリーナへの送迎がなかった。これは開催前からの課題であった。また、参加者のほとんどが関係者だった。固定された人の中だけで開催されたような、残念な印象であった。実施することはとても良いのだが、広報の方法や場所について、工夫が必要であると思う。予算的にも他の事業と比較し少ないが、優先順位を検討し、先に繋げていただきたいと考える。

(メンバー)

実行委員会が企画しているとのことだが、どのようなメンバーなのか。いろんな人がいる中で進められればよいが、障がい者の関係団体だけで構成された実行委員会だったのであれば、始める段階から垣根があるようで残念。

(メンバー)

市と障がい者の関係団体で企画し進めてきた。おっしゃるとおりだと感じている。地域のイベントの中に障がい者の関係団体や関連イベントが入り込むという形を、今後とはれないかと考える。葉山町ではそのように行っている。ふれあいフェス in ずしは、ふれあい作品展から普及啓発に力を入れる意味合いで発展したものだ。今後、障がい者の関係団体だけでなく、様々な参加者で楽しめる方法を検討したい。

(メンバー)

ふれあいフェス in ずしについては、広報のタイミングがとても遅く感じた。東京オリンピック・パラリンピックの効果を活用し、また車いすバスケットボールなどを目の前で見られる機会を広く周知できた可能性もあった。今後の普及に繋がれず、周知が遅く残念であった。

(アドバイザー)

福祉教育には非常に力を入れていることがよく分かる。学校は地域の中心になっていることから、学校をどう活用しようかなどの「学校」というキーワードからの発信は有効であり今後に期待する。教員や保護者との連携については、今後注力していきたいところである。

担い手の育成については、種まき、地道な継続等のコメントが資料に記載されているが、更にこれまでの成果をどのように捉え、次に続けているのかが重要だ。

参加者の固定化の課題についても、成果をしっかりと分析することにより課題解決へと繋げてもらいたい。

ふれあいフェス in ずしについては、楽しみながら気軽に若者が参加しやすいイベントと

するためには、障がい者の関係団体だけでなく、若者などの参加者側からの企画や発信も活用しコラボレーションすることや、いろいろな人が関わって進めて行くことが必要だと思う。

講座を行う際は、何を目標とするか、受講者に具体的に何をさせたいのかを明確しっかりと柱建てして企画し進めること。また、例えば地域の防災が課題であればそこが入口となるような講座を組むなど、地域の課題から入ると関心を持ちやすいだろう。計画策定と同様、明確化、具体化した組み立てをしていくことが大切だ。

### 環境づくりについて

(メンバー)

社会福祉協議会は生活困窮を切り口に相談に繋げ、障がい者の相談支援事業所は障がいがあるがゆえに生きづらさを感じる方々からの相談が入口となる。8050問題はひきこもりやニートの存在そのものが問題にされてしまいがちで、何とか働かせなければいけない、どうしてこうなってしまったのだろう、と考えてしまうことが問題だ。ひきこもりの多くは学齢期から問題を抱えており、そのような人が簡単に働けるようになるものではない。まずは興味を持ってもらう、興味を持っていることをやる、から入り、何年もの非常に長い時間がかかるものだ。存在自体を問題視するような風潮にならないよう、また、働かないことが問題であるとならないようにしていただきたい。

(メンバー)

4月からの新設される予定の地域共生係については、一つの窓口が全てを追えるわけではなく市全体で補い合う必要があると思う。具体的なイメージを持って進めていただきたい。専門性があるところもあり、専門職の人材づくりや地域の課題の発見などのアンテナづくりが大切である。また、専門性を超えた部分でも繋がりあう連携が求められる。

(メンバー)

大人になってから問題を抱えてしまったケースについては、福祉という言葉が邪魔になることもある。関係機関のネットワークをつくる、連携する、ということ自体が目的ではなく、ネットワークと連携が実際に稼働して支援に繋がることが目的であることを認識してほしい。また、「制度の狭間の課題を受け止める体制が整っている」という表記についても、困っている人にとっては困っていることでしかない。要するに、生活視点で物事を考えていけば自ずと連携するものだ。買い物、スポーツ、学ぶなど、生活上のキーワードから繋がっていければ良い。

(アドバイザー)

専門機関や専門職という人材については、その役割や活動を市民に伝えていく必要がある。福祉の問題とは、住宅、就労、お金等といった生活の問題がある。市民の生活を支援する機関や人材はどのようなものがあり、どのような形で支援され、活用するものなのか、事例を含めて分かりやすく伝えることが大切だ。専門機関や専門職を使うのは市民であって、理解してほしい相手方は市民である。常に目的に戻り、その目的を見失わないようにする必要がある。